

はじめに

「多民族社会における宗教と文化」をテーマとする共同研究は、2015年度で19年目を迎えた。本研究ノートには、3つの報告が掲載されている。そのうち2つは、本年度に3回おこなった共同研究会の報告である。1回目の研究会は、2015年6月に、国立民族学博物館の共同研究グループ「聖地の政治経済学—ユーラシア地域大国における比較研究」との共同開催で、インドにあるヒンドゥー教の聖地ワーラーナシーに関する報告がおこなわれた。まず、八木がワーラーナシーの街の形成過程について概要を話し、名城大学の柳沢究氏が、「融合寺院」とは何か：ヒンドゥー教の聖都ヴァーラーナシーにおける既存寺院を核とした増築現象について」と題して、ワーラーナシーに特異的にみられるヒンドゥー教の融合寺院について、現地での丹念な調査から導きだされた特徴と類型を報告した。柳沢氏の非常に詳細な報告は、本研究ノートに掲載されている。他の研究グループとの共催は、非常に刺激的であった。今後も可能な範囲で共同開催も考えていければと思っている。

2回目の研究会は、2015年9月に開催し、本学一般教育科の間瀬幸江氏が「人を描き 人と生きる—『ステンドグラス』という選択—ガブリエル・ロワールとは何者か—」という題で報告をおこなった。間瀬氏には、2015年度から新しく「多民族」グループの研究員に加わっていただいた。間瀬氏の報告は、本学の礼拝堂のステンドグラス作家に関するもので、本学のステンドグラスの素晴らしさをあらためて認識するとともに、ヨーロッパの職人としてのこだわりにも感銘を受けた。多くの図版や写真を駆使しての報告は非常に興味深く、夏季休暇明けすぐの研究会にも関わらず、多くの方々に参加していただき、時間が足りなくなるほど、活発な議論がおこなわれた。この報告も、多くの資料をもちいて丁寧にまとめられ、本研究ノートに掲載されている。

3回目の研究会は、2016年2月に、「女性のネットワーク」をテーマに開催した。東京外国語大学の椎野若菜氏が「ケニア・ルオ村落の女性たちのネットワーク—土器づくり活動から」、本学非常勤講師の木曾恵子氏が「家内を超える女性の共同性—東北タイ農村における住民組織の事例から—」というテーマで報告をおこなった。2つとも文化人類学に関する研究であったが、客員研究員、学部生や外部からの院生の参加もあり、様々な観点からコメントや質問が続いた。ルオ族の水壺にみられる象徴性や椎野氏自身が巻き込まれたグループづくりの騒動の話は面白く、また木曾氏の報告では、織物などに関わる女性の住民組織づくりが、時代背景や政府、NGOなどの動きと大きく関わることが興味深かった。これらの報告については、次年度の研究ノートに掲載予定である。

また、八木の「アザムガルの民俗歌謡」は、2015年1月に、東京で開催されたマハーラシュトラ研究会での発表をまとめたものである。インド社会が変化するなかで、資料的な意味をもつと思い、研究ノートの形で掲載した。

2015年度末をもって、本学に長く貢献された浅野富美江先生が定年退職される。「多民族」のグループ・メンバーとして共同研究に参加していただき、この場を借りて御礼を申し上げたい。次年度は、新たに加わっていただいた間瀬氏や、本年度の海外研修から復帰される市野澤氏をはじめ、研究員一同で、活発に研究会を開催できたらと考えている。学際的研究を主眼とするところでもあるので、広く門戸を開いていきたい。

共同研究代表 八木 祐子